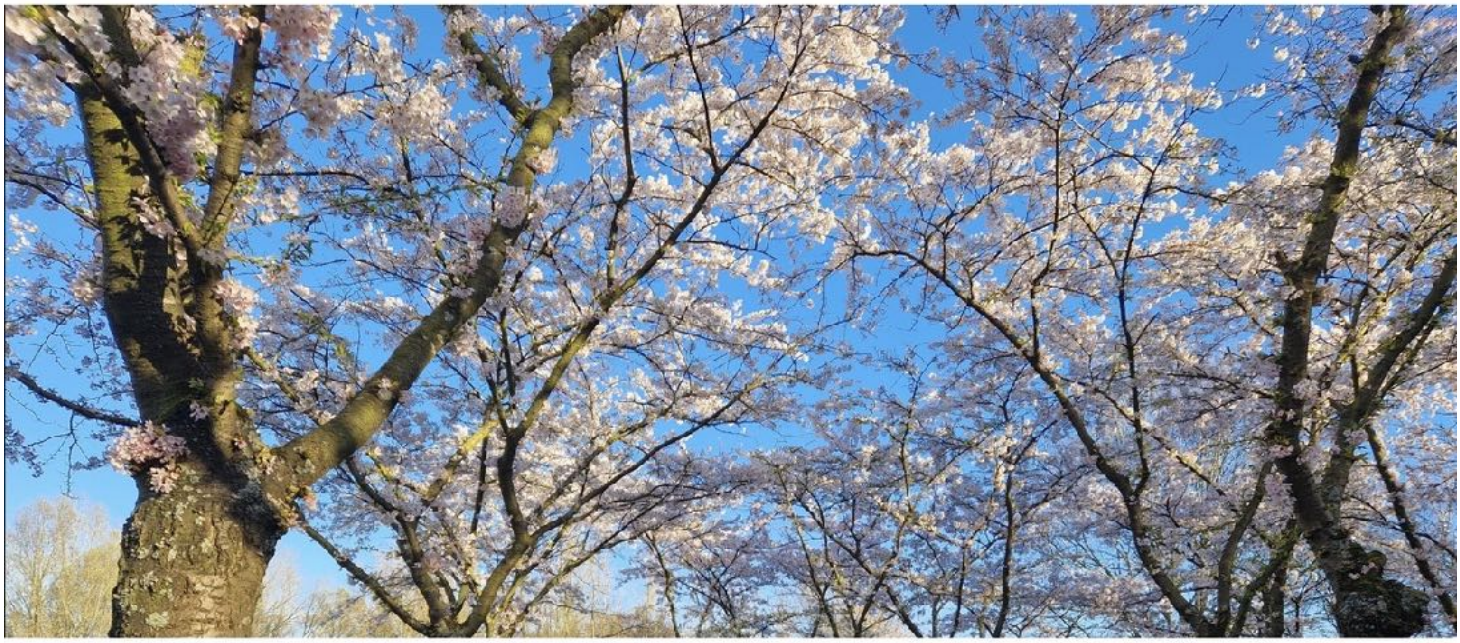
2023年9月3日

NALC Holland *Newsletter vol.13*



今年は運よく満開のアムステルフェーンの桜公園を見ることができました。

昨年の大晦日の朝、右目が握られるような痛さにみまわれ緊急病院に駆け込みました。右目に異物が入り角膜に傷がつきバクテリア感染していました。すぐに治療を開始しないと失明の可能性があると言われ、抗生物質での治療を開始しました。一か月ほど車の運転を控えるように言われ、医者に通うのに家内や娘に送り迎えをしてもらわなければなりませんでした。もし、車の運転だけではなく、助けを頼める人が（近くに）いない場合、どんなに困るか、援助してくれる人がいるありがたさを身をもって実感しました。

NALCがそういう助けを必要としている人に、どんどん手を差し伸べてあげられることを望んでいます。

NALC Holland 会長　　岩﨑国治

高齢者施設Zonnehuisでの「シニア交流会」トライアル報告

2023年3月29日 大塚千恵子

3月28日(火)14時より、アムステルフェーン市のBovenkerk地区にあるZonnehuisという高齢者施設にて、先方責任者のリクエストによりシニア交流会のトライアルセッション を行いました。 今回NALCからは会長の岩崎さん、河南さん、大塚の3名で参加、そしてもうお一人、河 南さんのお知り合いで起業のために個人事業主としてオランダに移住され、高齢者の介護 などにご興味をお持ちの中村さんにもお越し頂きました。

Zonnehuisからは4名の高齢者の方たちの他、イベント企画の責任者であるSさん、 Aさんのお二人に交流会セッションの見学も兼ねてご参加頂きました。 今回のトライアル企画にご参加頂いた4名の高齢者の方たちですが、あえて日本人のボラ ンティア団体であるNALCのためにインターナショナルなバックグラウンドをお持ちの方 にお声がけ頂いたようです。

Rさん:ご主人がポルトガル人。お近くにお住まいだそうで、よくご主人が施設に立ち寄ってくださるそうです。

Hさん:子供の頃インドネシアのスラバヤに7年間滞在したことがあり、インドネシア 料理が得意。元料理研究家で、ご自身のお料理に関するご著書もお持ちだそうです。

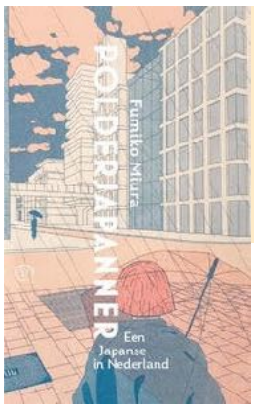
Jさん:インドネシアのパプアご出身で、1962年にインドネシアからオランダに移住 されたそうです。

Tさん:Zonnehuisで唯一の日本人入居者かと思います。当初は「日本語でTさんの お話相手ができる方がいないか?」とJWCにZonnehuisから打診があり、JWC経由でNALCを先方にご紹介頂いたのがこの企画のきっかけとなりました。

今回は1時間のトライアル交流会ということでそれぞれの自己紹介他、その後皆さんのお 名前をひらがなで書いてあげ、お名前を覚えてもらい、各参加者の簡単なご経歴やバック グランド等をお話し頂きました。

NALCという団体とその活動についてZonnehuisのご担当者に知っていただく良い機会と なった上、今回のトライアル交流会に対して前向きな印象を持っていただいたのでは? と 思えるような和やかな雰囲気で皆さんとお話ができました。

今後どのような形で交流会を継続していくのかZonnehuisと話し合いを進めていくことに なるかと思いますが、定期的な交流会開催が決まった場合、是非多くのNALC会員の方たちにもご参加頂ければ嬉しいです。



Fumiko MIURA著　“Polderjapanner” を読んで

Anthony Millenaar

Fumiko Miura (1972) werd geboren in Shinshiro, Japan, en studeerde sociologie aan de Erasmus Universiteit. Ze woont sinds 2001 in Rotterdam, waar ze werkzaam is als leraar Japans. *Polderjapanner* is haar eerste boek.

　オランダに住む多くの日本人はオランダの価値観をよく知っています。Fumiko MIURAさんはオランダに20年以上住んでおり、オランダ人男性と結婚している女性の一人。 エラスムス大学で社会学を学び、「オランダに住んでいた日本人」で修士号を取得。その発見から2023年の初めにオランダ語の本 ”Polderjapanner“ を出版しました。 日本人とオランダ人の類似点を非常にユーモラスな方法で表現し、新聞や雑誌で高評価を得ています。彼女の本は、日本のことわざ「灯台下暗し」で始まります。これは、あまり身近な事はかえって気がつかない、という意味です。ある事柄を別の文化から、または別の文化の人の目で見ると、自分の文化が良く見えてきます。Fumikoさんはこれを彼女の本の中で生き生きと説明しています。

　日本人とオランダ人の違いは、前者の方が謙虚であるということです。彼女は良い例を挙げました。彼女は「Ik ben aan de beurt（私の番です）」と言えるようになるまで、店で順番を延々と待ち続けたといいます。 では二つの文化の類似点は？　人々が勤勉であるということ。おそらく、それは日本の儒教とオランダのカルヴァン主義によって説明できるでしょう。その結果、日本人の場合はさらに過激になります。なぜなら、一生懸命働きすぎて亡くなる人もいるから。 （日本語で「過労死」）　オランダ人は燃え尽き症候群になり、そこから回復することが可能です。 現在では、どちらの文化においても、日本では「Ikigai」、オランダでは「Niksen」のように、リラックスしています。

　オランダ人男性は週末に自分で家のリフォームをするのが好き。一方、日本人男性の家は、建設会社に家の修理を依頼しなければならないほど荒れています。 オランダ人女性は家をきれいに掃除するのに忙しい一方、日本人女性は物で溢れる部屋を片付けるのに苦労しています。片づけの第一人者である近藤麻理恵氏の本『opgeruimd』がオランダでなぜこれほど人気があるのか理解し難い事です。

　Fumikoさんは ”Polderjapanner“ がオランダでとても人気なので、さまざまな分野での講演を依頼されています。私も先週講演会に参加しましたが、素敵な会でした。公演中に沖縄の三線の演奏もありました。

(Photos:Anthony Millenaar)

Stichting AFASIE THERAPIE Amsterdam を訪問して

東 雅子

いけばな生徒さんのMarjaさんに相談を持ちかけられました：「ねえマサコ、私がボランテイアをしているStichting AFASIE THERAPIE Amsterdam で、いけばなワークショップをしてくれない？　AFASIEがあり、トレーニングに通ってくる人たちを対象に、毎週金曜の午後、楽しいイベントを企画してるの。　AFASIEがある人もお花に触れたら気分良くなると思うの。」
ゆっくりと話してくれるMarjaさんとの会話で、理解できない単語がありました。「AFASIE 」。それは何？　Marjaさんの説明とインターネット検索で少しづつ解ってきました。AFASIE　は、脳に損傷を受け、言語を司る部分が適切に機能せず、自分の言いたいことを表現できない場合を意味します。脳卒中などが主な原因です。

- 言葉が出てこない
- 相手の言うことが理解できない
- 読み書きがしづらい

Logopedist （スピーチセラピスト）が中心になって治療訓練にあたっています。コミュニケーション力の向上を目指し、
- 問題点の追求
- 療法とその目標を、患者さんとLogopedistが共に設定
- カードやアプリなどのヘルプ材料を利用を習得

とあります。

次のようなグループ練習プログラムも組まれています。
- コンピューターの利用習得グループ
- 読み書き習得グループ
- デイスカッショングループ

広報誌などには、食べ物を飲み込みにくい人/時の為のレシピ、紐の靴を簡単に留める補助道具、片手でファスナーを閉める道具の紹介なども見かけられ、ここにおられる方々の苦労が感じられます。

bron: jubileummagazine 2021, SAA-Amsterdam)

「言いたいことがオランダ語でうまく表現できない」という意味ではオランダ語を母語としない私もそんなハンデイを背負った者の一人といえますが、人は私の外見からすぐに「この人の母語はオランダ語ではないだろう」と想像してくれます。　それに比べて外見はオランダ人なのに「言いたいことが（母語である）オランダ語でうまく表現できない」という状況は相当に辛いものがあるのでは、と思いました。

WS当日、いけばなをご紹介し、一人一人が作品を作るお手伝いをし、お花に触って、色を楽しんでもらいました。　年配の男性は花の本数が少ないいけばなが気に入ったようでとても熱心に、上手にいけられました。おしゃべりな女性はお花を短く切るのが嫌なようで、長いまま何本もいけました。参加者の中でおそらく一番若い女性は「お花が大好き！」とはしゃいでおられましたが右腕が全く動きません。それでも懸命に片手で花を切り、自力でいけようとしている姿に心を打たれました。

アムステルダム南の、住宅地の一角にあるこのセンターは、温かな雰囲気の空間。「ここにくれば今日も仲間に会える」、と思いながら様々な患者さんが集まってくるのだろうな、と想像しながら帰路につきました。

Stichting AFASIE THERAPIE Amsterdam
http://afasietherapie-amsterdam.nl

- Afasie centerでボランテイア-

2011年から１週間に半日、ボランティアをしています。毎週行ったり何ヶ月ぶりに行ったり。コロナを経て組織は変化しました。Pijpの素敵な建物に引っ越したおかげで新しいこともできるようになりました。

各患者さんとロゴペディストが一緒に目標を設定します　例えば会話力や読解力の向上。個人的な治療に加えて、患者さんは似たような目標を持つ仲間と一緒にこれに取り組むことができます。これらの患者さんにとって、保護された環境で自分自身を表現し、同様な患者さんと接触できることは非常に楽しいことです。 ロゴペディストまたはボランティアが指導にあたっています。

私はこれらのボランティアの一人であり、楽しんでいます。患者さんが成長し、彼らと絆を結ぶのはとてもうれしいことです。 時折、街のどこかで患者さんにばったり会って、おしゃべりすることも。　患者さんの病状が悪化したり、亡くなったりして悲しいこともあります。しかし、それはそれぞれの人生の一部分なのだと思います。

Marja

メデイアで見つけた　ちょっといい話を3点ご紹介します。　いずれも素敵なお話なのですが、私が読んで一番嬉しかったのは。。。3番め。
みなさんはいかがでしょうか？

＊ 無料弁当の魅力はお弁当だけではありませんでした。
＊ 美味しい嚥下食を提供してそれを普及させる板前さん。
＊ 目の不自由な人に小学生が差し伸べた手がうんだ感動話。

（いずれもNHK NEWS WEBより）　東雅子

― 路地裏食堂の店主が無料弁当を配るワケ ―

大阪府豊中市にある小さな食堂。そこでは、とっておきのお弁当が週３回、手渡されています。値段は…なんと“無料”です。2年前に始まったこの取り組み。お弁当を目当てに食堂を訪れたはずが、いつの間にか自分の悩みまでつい話してしまう。そんな人が後を絶ちません。何が多くの人をひきつけるのか。そこには、店主と訪れる人の、優しくてあったかい物語がありました。。。。。

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220823/k10013781031000.html

― 目指せ「嚥下食の街」　室蘭で始まった挑戦 ―

高齢になっても、障害があっても、みんな一緒に同じ食事を楽しんでほしいという願いから、室蘭市で新しい取り組みがスタートしました。食べやすさだけでなく、見た目や味にもこだわった嚥下（えんげ）食を、**飲食店で**提供することになったのです。目指すのは、「室蘭　嚥下食の街」です。

一緒においしいものを食べるはずが

取り組みのきっかけは、室蘭市でデイサービスなどを行う介護施設の所長を務める波方元希さんが　かつて目にした出来事でした。
米寿を迎えた男性利用者をお祝いしようと、家族や親戚が食事会を開き、テーブルにはごちそうが並びました。しかし、その男性はかむ力や飲み込む力が弱かったため。。。。

https://www.nhk.or.jp/hokkaido/articles/slug-n039527f929f3

『バスが来ました』小さい手のリレー

目が見えない男性の背中に添えられた小さな手が、長年、バスで通勤する男性の乗り降りをサポートしてきました。10年以上続く「小さい手のリレー」　その親切は今もつながり続けています。

「もう仕事辞めようかな」

和歌山市の山崎さんは、耳から聞こえてくる音と杖を頼りに生活しています。
勤め先まではバスで通勤しています。

山崎さんが目の病気を患い、視力を失い始めたのは35歳のころ。
道路の溝や、車の音。それまで気にならなかったことが大きな負担となりました。
バスに揺られて職場にたどりついた時にはもう、くたくたで、仕事にも嫌気がさしていました。
山崎さんは、目が見えなくなった時、いちばん仕事がバリバリできる時期にできなくなってしまったので、もう仕事も辞めようかな、と荒れた時期がある、と語ります。そんなことばかり考えていた、ある朝。山崎さんはいつものように停留所でバスを待っていると、女の子の声がします。

「バスが来ました」

腰の辺りには、小さな手の感覚。
女の子がそっと腰を押しながら、バスの入り口まで案内してくれたのです。　その日から女の子と山崎さんの交流が始まり、その子が卒業してもその後輩たちが手を差し伸べ続けました。そして感動したのは山崎さんだけではなく、子供達も、なのでした。。。。

https://www3.nhk.or.jp/news/html/20220411/

Colofon
発行　NALC Holland　URL: http://nalcholland.nl
担当：東、松原
連絡先：masako@telfort.nl / 06 2425 2523